

子どもたちの安全



はじめに

幼い命が犠牲になった旧今市市での痛ましい事件は、市内の子どもを取り巻く環境を一変させました。異常な緊張状態の中、子どもを一人にしない、子どもの安全を守る、という強い思いから次々と防犯パトロール隊が組織され、見守り活動が行われてきました。

あの日から6年が経過しようとしています。5市町村の合併を経て誕生した新しい日光市でも、市内全域で、子どもの見守りに関するさまざまな活動が、各地域の実情に合わせて行われています。

しかし、事件が未解決であること、活動が長期化し負担感が大きくなっていること、活動の人手不足や後継者不足の声が上がっていること、各地区の活動に差があることなど、さまざまな問題も生じています。

その一方で、子どもが狙われたり、巻き込まれたりする事件・事故は後を絶たず、子どもたちの安全を確保することは大きな課題といえます。

今回は、これまでの市の取り組みや、見守り活動に取り組む団体などを紹介し、子どもの安全についてあらためて考えます。

事件

平成17年12月1日、大沢小学校の児童が下校途中に行方不明となり、翌日、茨城県内の山林で遺体が発見された。警察はこの6年間、懸命な捜査を続けてきたが、事件解決には至っていない。現在も200名体制で捜査を続けている。

なお8月から、犯人に結びつく有力な情報提供への懸賞金が、500万円に引き上げられた。

事件後の主な防犯対策

旧今市市では、事件を受けて子どもの安全確保のため、緊急に21項目の対策を実施しました。

合併後の日光市でも、子どもの安全対策は重要課題であり、市はさまざまな取り組みを行ってきました。ここでは主なものを紹介します。

防犯灯設置を推進

夕方や夜間の犯罪を防止するため、防犯灯の設置を推進しました。その結果、事件前の7,516灯から平成22年度末の9,394灯へ、5年間で1,878灯増加しました。

防犯灯の電気料金については、料金の2分の1を補助金として自治会に交付していましたが、自治会の負担軽減と防犯灯設置をさらに推進するため、平成20年度からは補助率を3分の2に引き上げました。

自主防犯団体の育成

自主防犯パトロール隊の活動支援として、活動保険料を全額負担しています。

そして、パトロール用ベストや腕章、自動車掲示用の安全安心パトロールマグネットシートといった活動用品の配布も行い、自主防犯団体の育成を図っています。



防犯パトロール用ベストなど

また新たな取り組みとして、7月に48団体、82名の参加を得て、市内自主防犯団体の意見交換会を初めて開催しました。

青色回転灯とパトロール

青色回転灯を装備した公用車を配備するとともに、運転に必要な「パトロール実施者証」を取得するための職員研修を定期的に開催。平成23年度は57名が実施者証を取得し、随時パトロールを実施しています。

スクールガード・スクールガードリーダーの設置

市教育委員会は、市内全ての小学校に、PTAや自治会などを中心としたスクールガードの設置を依頼。さらに全ての中学校区ごとに、市が委嘱したスクールガードリーダーを配置しています。スクールガードリーダーは、担当区域にある小学校の、校舎内外や通学路などを定期的にパトロールし、気付いた点などを



「子ども110番の家」看板

学校に伝えています。

各学校では、児童生徒の登下校状況を把握して、通学路安全マップを作成しました。また先生たちが、登下校時の見守り活動に取り組んだり、「子ども110番の家」設置数増加のために、登録・看板設置を依頼したりしてきました。

放課後児童クラブの充実

両親が共働きの子どもたちのための、放課後の居場所として、市内26校の小学校のうち、19校に41(事件前は20)の放課後児童クラブを開設しています。5月1日現在、市内の小学生の34.2%に当たる1,482名の子どもが加入しています。

クラブ設置に関する国のガイドラインでは、受け入れは1〜3年生が基本とされますが、4年生以上の受け入れを制限していません。そこで市では、保護者の就労支援と子どもの健全育成を図るため、6年生までの受け入れを行っています。



須永右成さん
瀬尾自治会 会長

瀬尾自治会 自主防犯パトロール隊

瀬尾自治会では、公民館活動ボランティアとして事件以前に組織していた「瀬尾ふれあいボランティア」を中心メンバーに置き、平成18年6月から見守り活動を開始しました。その後、現在のパトロール隊を組織し、活動を続けています。隊員は主に60〜70歳代の30名程度。パトロール用ベストと腕章は市から支給を受け、冬用ジャンパーは自治会で用意しています。

パトロール隊について、瀬尾自治会の須永さんに話を聞きました。

パトロール隊の活動は？

週4回、通学路上の交差点3カ所での登校時の見守りと、防犯灯の点検を兼ねた、車での夜間防犯パトロール、春休み中の丸山公園の見回りで。また、1学期・2学期の前に会議を開催して活動を確認し、市や県が主催する防犯に関する研修などにも積極的に参加しています。

地区内には、自主的な見守り・付き添い活動を毎日行っている高齢者がいて、感謝と同時に「自分たちも頑張らなければ」と感じています。

「工夫されている点は？」
隊員の顔合わせと親交を深める目的で、年に何度か懇親会を開いてい



ます。義務感だけでは続かないし、息抜きは必要ですからね。

瀬尾地区は以前から公民館活動が活発で、公民館役員に若い人が多いことも特徴です。地域が活性化して良い状態にあることが、防犯にもつながっているのだと思います。

「活動が続く理由は？」
顔見知りになった子どもたちからの元気なあいさつが、隊員にとつて、何よりの励みになっています。

駅前交番連絡協議会

駅前交番連絡協議会(以下、協議会)は、日光警察署駅前交番管内10自治会(稲荷町三丁目、松原町、相生町、若杉町、東和町、宝殿、所野霧降、霧降東、小倉山)の各自治会長と防犯連絡員、計20名で組織しています。毎月1回、第1水曜日の、集団下校時の付き添い・見守りと、毎月15日(年金受給日)のATM前での振り込め詐欺防止の呼び掛けが主な活動です。市からパトロール用ベストの支給を、駅前交番からは防犯キャップと腕章の貸与を受けて活動に取り組んでいます。

重複する団体と個別の活動

駅前交番の管内には、防犯に関する複数の団体が存在していました。一つ目は協議会で、平成9年3月に管内10自治会の防犯連絡員など13名で組織。総会や定期的な会議、不定期での交通安全や防犯に関する活動を行っていました。二つ目は、平成17年10月に、相生町、東和町、若杉町の3自治会30名で組織した日光駅前地域防犯連絡協議会。地域の防犯を意識して結成したところ、その後、大沢小学校の事件が発生。当時、3自治会の地域には、日光小学校全校児童の約2割の子どもが住んでい

交番連絡協議会
地域住民の身近な犯罪や事故、災害などの防止を主な目的として、日光・今市警察署管内の各交番・駐在所単位に組織されている。

自主防犯パトロール隊
地域の安全安心のために、自主的に防犯活動に取り組む団体。自治会単位で組織されることが多い。3月末時点で市内には、94団体、3,187名の登録がある。

たそうです。協議会の会長で、若杉町自治会長でもある大橋さんは、「事件を受けて、特に登下校時の見守りや地域の見回りを盛んに、そして真剣に行いました」と当時を振り返ります。後に宝殿自治会も加わり、4自治会で活動を続けました。

協議会の活性化と活動の集約

一方、平成21年3月に着任した駅前交番所長から、協議会を機能させようと提案がありました。

まず、警察が得た防犯に関する情報は、自治会でも共有した方が良く、このことで、会員に自治会長も加わることになりました。そして、年間活動計画を作成し、総会も開催した協議会は、本格的な活動を開始しました。

その後三つ目の組織として、平成22年2月、管内10自治会の会長で組織する市防犯協会駅前支部を設立する必要が生じた際に、「3団体は、会員や活動の目的が重なることから協議会の活動に集約することになりました」と大橋さん。

こうして現在、駅前交番と10自治会が連携して、地域防犯に取り組んでいます。

振り込め詐欺防止と見守り

平成21年6月から年金受給日に、



管内2カ所のATM前で、会員と警察官が協力して振り込め詐欺防止活動を始めました。平成22年6月からは、毎月第1金曜日に下校時の子どもの見守り活動も始めました。平成23年度は見守り活動を効率的に行うため、集団下校日に実施しています。管内には小学校が2校あり、各校の実情に合わせて見守り活動を行っているそうです。

○日光小学校は、駅前交番の警察官と合同で、小学校近くからの下校班への付き添いと、各自治会有志による交差点での見守り。

○所野小学校は、小学校近くの交差点やバス停での見守り。

大橋さんは「この地域は、不特定多数の人が行き交う観光地という特殊性があるものの、子どもの自宅近くまでの付き添いができるなど、見

守り活動は問題なくできています」と話します。

今後の取り組み

今後について、「防犯は点ではなく面で考え広げていくべきなので、まずは現在の活動を継続させたいです。さらに、保護者などにも参加してもらい、見守りの回数を増やすことや、高齢者の見守りを行うことも考えています」と話す大橋さん。協議会の取り組みが、市全体に広がることを期待しています。

また、市の防犯への取り組みとして、全自治会そろいのパトロール用ベストなどの必要性も感じています。「市内各地のパトロール隊員が同じものを着用すれば、市が防犯に力を入れてアピールになり、また犯罪の抑止力にもなるはず」。



大橋明義さん
駅前交番連絡協議会 会長



諏訪富一さん
今市第三小学校PTA 会長

今市第三小学校スクールガード

1・2年生の低学年下校日。下校時刻になると、子どもたちは住む地域ごとの集合場所へ集まります。この日のスクールガードは、PTA会長の諏訪さんの他に、本部役員4名が集まりました。予定では東町方面の下校班に付き添うはずでしたが、教頭先生からの依頼で、急きよ別の方面に変更になりました。諏訪さんによると、「行き先は臨機応変に対応しています」とのこと。

今市第三小学校スクールガードは、PTAの本部役員8名と各専門部役員8名の合計16名で組織し、4班に分かれて月1回ずつ、下校時の付き添いを行っています。教頭先生が作成する予定表を基に各班で調整し、必ず二人以上で活動しています。

先生が地域ごとに子どもの人数を確認し、「さようなら」のあいさつをすると、付き添う予定の子どもの人数がみるみる減っていきます。保護者が学校まで迎えに来る子や児童クラブに行く子などが多く、「いつもこんな感じですよ」と諏訪さん。歩き出す8名の子どもの列に続いて、活動が始まりました。先に行く子や立ち止まる子など、



思い思いに歩く子どもたち。しかし、スクールガードの皆さんは、危険がなければ特に注意したりせず、一緒に話しながら歩きます。自宅が近づき列から離れる子や、保護者が迎えに来る子など、次々に人数が減ります。そして1キロメートルほど歩いたところで、最後の子の保護者と出会い、活動は終了となりました。

活動後、「班員の日程調整が大変な程度で、他に大変と思うことはありません。子どもと一緒に歩くことも楽しいです」と話す諏訪さん。「でも、付き添うこと自体が異常な状況なので、子どもだけで下校できる環境を作ってあげたいですね」。



ります。事件直後の異常な状態は、いわば「振り子が振り切れた」ようなもの。その振り子を、ある程度のところまで戻す時期が来ていると感じています。事件以前の状態に戻る訳はありませんが、子どもの安全を確保しながらも、子どもの成長を妨げないようにするためには、どうすればいいのか。協議会では、それらの答えとして、3つの活動に取り組むことになりました。

新たな見守りへの取り組み

①青パトによる大沢地区全域の見守り活動

1歩下がった立場で、子どもたちの安全を確保できる見守り活動として、青色回転灯装備車両によるパトロール(青パト)を考え、協議会関係



～インタビュー～
だいもんきんいちろう
大門金一郎さん
大沢中学校区
児童生徒健全育成協議会 会長

大沢中学校区
児童生徒健全育成協議会

大沢中学校区児童生徒健全育成協議会(以下、協議会)は平成19年6月に、大沢中学校区にある3つの小学校(大沢小、南原小、猪倉小)のPTAとそのOB、地域のボランティア、さらには学校や自治会、スクールガードなどの関係者で組織しました。各自治会やスクールガードごとに、それぞれ子どもの見守り活動に取り組む他、協議会として児童生徒の健全育成を目的に、地域防犯を主とした活動に取り組んでいます。また、会員の知識や技術の向上を目指して、年2回、6月と12月に、活動に役立つ内容で研修会を開催しています。これは、事件を風化させないという狙いもあります。

見守り活動の現状

現在の見守り活動は、3校それぞれで大きく異なります。○大沢小学校は事件後、子どもを一人で登下校させないことを徹底した。大沢ひまわり隊を組織し、危険箇所での見守りや完全付き添い、防犯パトロールなどに取り組んだ。その後、スクールバスの試験運行などを経て、放課後児童クラブが希望者を全て受け入れてくれるよ

見守りの意味

見守り活動を続けるうちに、「あいさつがちゃんとできない」「子どもの列が乱れている」「ふざけながら歩いている」などと感じてしまうようになりました。また、子どもが一人で歩いている様子を見かけると、すぐに「危なくないか」と考える自分に気がきました。見守りのはずが見張りになっているようで、自身身に違和感を覚えましたね。そして、誰のため、何のための見守りなのかと、見守ることの意味を考えるようになりました。

また、見守りが行き過ぎると、子どもたちの集団生活に影響を与え、子どもの成長を妨げることにつながる



ほり まさひこ
堀 雅彦
生活安全課副参事

栃木県警察から派遣されている警部。誘拐防止を目的とした防犯教室を、市内の保育園や幼稚園、小学校で実施。

警察行政と地域行政の、二面的な立場から「安全で安心なまちづくり」を考えた時、「犯罪がなく、子どもからお年寄りまで、誰もが安心して暮らせる明るいまち」をイメージします。

一人一人が強い防犯意識を持って生活することは、個人として最も重要です。でも、それだけでは「犯罪のない明るいまち」を築くことはできません。都会で犯罪が多発する理由は、自己防衛力は優れていても、「地域の和、コミュニケーション」が希薄になっているからです。

担当する防犯教室では、園児や児童、生徒に、「大きな声であいさつをしよう。元気がいい子どもには、悪い人は声を掛けたりしないよ。だって、大声で騒がれたら困るからね」と教えています。

誰もが明るく、あいさつを交わす「あいさつ通り」があるまち。誰もが優しく、子どもやお年寄りに関心を持って声を掛け合っているまち。

そんな明るいまちに、犯罪者の魔の手が入る隙はありません。なぜなら、地域住民全員が防犯意識を持っているのですから。

大人たちのさりげない注意が行き届いた地域の中で、子どもが自分たちだけで登下校し、遊びに出掛ける特別な見守りや付き添いが必要としないまち。そんな日光市を目指して、あなたも、自分にできることを始めてみませんか。

子どもたちの輝く未来のために。

子ども110番の家

危険を感じて助けを求めてきた子どもを保護し、警察などに連絡してもらう役割を担う個人宅や店舗のことで、目印として黄色の看板を設置している。通学路を中心に協力を募り、3月末時点で1,510件の登録がある。

子ども110番の家

川室の石島友枝さんはクリーニング店を経営。大桑小学校の依頼に応じて、10数年前、父である壽雄さんの代から子ども110番の家(当時はひなんの家)に登録しています。

「本当に危険なことは起きていませんが、「道路に犬がいて通れない」「傘が流された」「鍵を持ってないの」で家に入れない」など、ちょっとした困ったときに頼られたことが何度かあります」と石島さん。店の前の狭い道路上が集合場所で危なかったことから、子どもたちの登校時に、店



を集合場所として開放しています。

「日ごろから気軽に立ち寄れる場所であれば、本当に困ったときも頼りやすいと思うので、今後でもできる限り続けたい」と話します。

おわりに

取材でお会いした皆さんからは、子どもを守りたい、そして地域を変えたいという、熱い思いが溢れていました。その思いが、それぞれの団体を動かす原動力になっていると強く感じます。

「子どもの笑顔を守りたい」と誰もが願っているはずです。そのため何ができるのか。地域の防犯パトロールに加わる、スクールガードに登録する、といった直接的な活動に取り組むことも一つの方法です。

あるいは、普段の生活の中で、無関心でいることをやめる。通勤の途中や買い物の途中で、子どもに、そして地域に少しでも目を向ける。それも子どもを守るための第一歩です。一人一人の小さな1歩は、やがて地域の安全を守る、大きな力につながるはずです。

者やPTA役員OBなど10人で構成する青パト隊を組織しました。

2人1組でなければ走らせることができないため、夕方の時間に人を集めるのは大変ですが、犯罪の抑止力として、その効果を感じています。

②「顔の見える地域」の仕組みづくり

「何か協力したい」と思う子ども親世代と、防犯パトロールの活動に取り組む世代との、顔合わせの場を設けようと思っています。

具体的には、中央公民館などの協力を得て講座を開催し、講座の最終回に、まとめとしてのイベントを開催する予定です。イベントや講演会などで顔見知りになることが、日常でのあいさつなどの声掛けにつながり、地域の活動に参加するきっかけにもなるからです。

防犯は特別なことではありません。地域に住む人それぞれが、日常生活の中で地域に目配りしてくれば、それが防犯につながります。地域の人々が、無理なく自然な形で防犯活動に参加できる、そんな仕組みを作りたいですね。

③情報の共有や組織のネットワーク化

現行の不審者情報システムでは、情報が届くまでに時間がかかり、必要なとき、すぐ行動に移れません。そこで協議会として、警察と学校(教育委員会)、自主防犯団体の間で、

講座内容	日時・会場
「顔の見える地域づくり」 「つなぐ」が「つなぐ」の鍵	6/19日 13:00-14:30 大桑小学校
「顔の見える地域づくり」 「つなぐ」が「つなぐ」の鍵	8/20日 13:00-14:30 大桑小学校
「顔の見える地域づくり」 「つなぐ」が「つなぐ」の鍵	9/24日 13:00-14:30 大桑小学校
「顔の見える地域づくり」 「つなぐ」が「つなぐ」の鍵	11/12日 13:00-14:30 大桑小学校
「顔の見える地域づくり」 「つなぐ」が「つなぐ」の鍵	12/12日 13:00-14:30 大桑小学校



協議会の役割

防犯に関する情報を共有できないかと考えています。情報がすぐに届けば、例えば、偶然その情報の地域に居合わせた人が、「少し注意して見よう」という行動を起こせるなど、全体的な見守り活動につながる

ことが期待できるからです。

また、防犯団体のネットワーク化(横のつながりを築く)ことも重要でしょう。単に情報交換ができるという利点だけでなく、隣接する区域を交代で見回するなど、活動での負担軽減やさまざまな協力ができる可能性も生まれます。

いま、各地の見守り活動団体で、人手不足、後継者不足の声が上がっています。人は、義務感だけでは活動は続きません。誰かに必要とされている実感が、続ける力になるのです。情報がすぐに届くことや他の団体とのつながりを築くことは、人を動かす力になるはず

今年5月、大沢小学校に通う根室地区の子どもたちが、試験的に「子どもたちだけの下校」を行いました。参加したのは、初めて付き添いのない下校をする子ばかりで、誰もが「楽しかった」という笑顔を見せてくれたそうです。

登下校は本来、子どもたちがいろいろなことを学ぶ時間であるはずで、す。大門さんは、「子どもたちだけで登下校させたい」との思いをさらに強くしました。

◇ ◇ ◇